



四万十町
町内「ふら〜」散策

中村

なかむら



中村は、先月号で掲載した「勝賀野地区」と隣接する小さな集落である。県道19号から県道323号に入り、上小野川地区を過ぎ勝賀野川を一度渡る。その辺りを含めて西方にかけてが中村地区である。小さな集落で、6世帯・13人の住民が暮らしている。

ここ中村は、戦国時代の地検帳に「中村勝賀野之村」とあるように、勝賀野と一体とされてきた。江戸時代に入ると、勝賀野村が「勝賀野分」「中村分」と分けて記載されるようになった。これは、山内の支配下になった時に家臣の領地(知行)割りを行う都合上、支配地をより細分化する必要性があったものと推測されている。

さて、中村地区を語る上でその名に触れないわけにはいかないのが、この地(当時・松葉川村中村)出身の異色の天才画家・今西中通いまにしなかつうつ。本名・忠通ただみち「1908〜1947」である。現在も「幻の近代画家」として彼の評価は高い。

経済的に恵まれた家庭に生まれた中通は、松葉川東尋常小学校↓窪川高等小学校↓高知市の城北中学校(現、小津高校)へと進み、昭和3年、19才で上京。川端画学校というところで絵画を学ぶ。そこからの中通の「描くこと」への猛烈な追求が始まる。

先輩画家たちの影響を受けながら、



道路沿いにある今西中通の功績を記した案内板。ぜひご覧になってほしい

自身のオリジナルな表現技法を探求していく。常に探求を続けるがゆえに、その技法・画風は決して固定化されない。初期の頃はフォービズム風の表現を好んだ。フォービズムとは、20世紀初めにフランスで起きた絵画運動で、直感的で生命力あふれる画風である。野獣派とも呼ばれる。その後、さまざまな抽象技法などを取り入れながら、セザンヌ風の具象表現へと変遷していく。日本の近代画家の中でも、これほど表現技法が大きく変遷していく画家はあまりいない。「自分が表現したいものを、より自分の感性に忠実に表現すること」そのことに純粹であるがゆえに、画風や技法に縛られることから遠かったのであろう。

肺結核を患った中通は坂出で療養生活を送った後、福岡に移り39歳という若さでこの世を去った。わが町が生んだ偉大なる「表現者」である。

町のうごき				四万十川の水質状況			
(5月31日)	人口	前月比		適正值(mg/l)	6月10日		
男	8,621	-6	男 3 14 18 14	リン酸	≤ 5.0	測定範囲以下	
女	9,643	-7	女 3 15 22 17	硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下	
計	18,264	-13	計 6 29 40 31	アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下	
世帯数	8,670	19	(5月中の届出)	アニオン活性剤	≤ 1.0	0.250	
				化学的酸素消費量	≤ 10.0	測定範囲以上	

調査：大正(吾川) 資料：四万十高校自然環境部

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/>

※ 広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)